

平川 南著

よみがえる古代文書

— 漆に封じ込められた日本社会 —



岩波新書

349

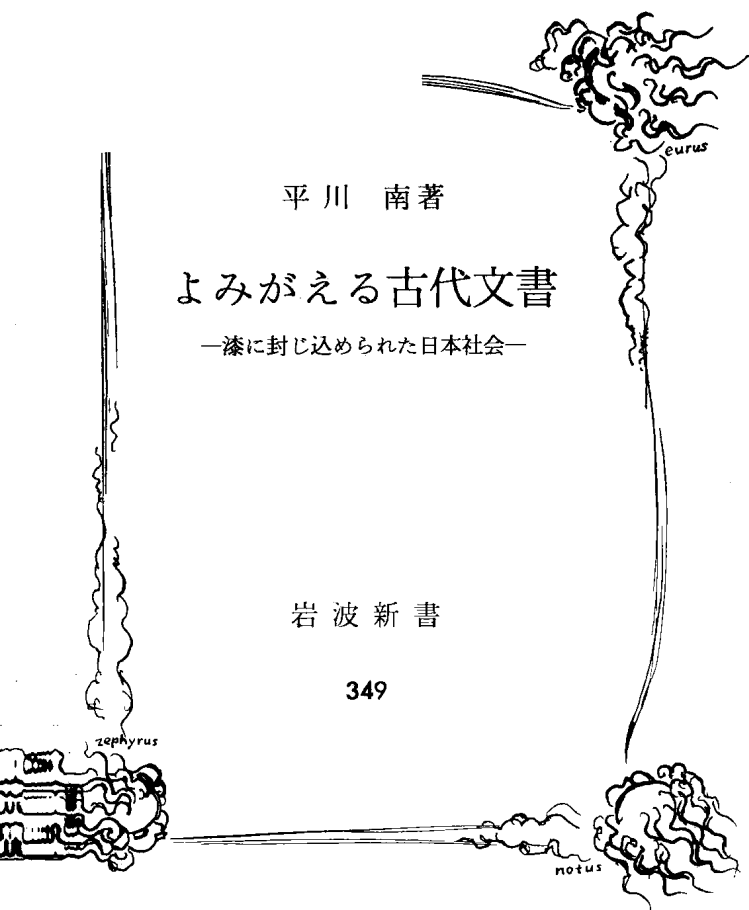
平川 南著

よみがえる古代文書

—漆に封じ込められた日本社会—

岩波新書

349



平川 南

1943年山梨県生まれ

1965年山梨大学学芸学部卒業

専攻—日本古代史

現在—国立歴史民俗博物館教授

著書—「漆紙文書の研究」(吉川弘文館)

「多賀城碑——その謎を解く」(共著)

(雄山閣出版)

新版「古代の日本」第8・9・10巻

(共著)(角川書店)

よみがえる古代文書

定価はカバーに表示してあります 岩波新書(新赤版)349

1994年8月22日 第1刷発行

著者 ひらかわ みなみ
平川 南

発行者 安江良介

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111

新書編集部 03-5210-4054

印刷・精興社 カバー・半七印刷 製本・永井製本

©Minami Hirakawa 1994

ISBN4-00-430349-4

Printed in Japan



本書に登場する遺跡

目次

序章 地中に埋もれていた情報	1
—— 漆紙文書発見顛末記 ——	
I 古代史のなかの漆	15
一 珍重された宝物	16
二 どこで生産され、どのように調達されたか	20
三 藤原仲麻呂の陰謀と東北の富	25
II 漆紙文書のかたちと残り方	31
一 なぜ円形で遺存するのか	32
二 文字の残り方のパターン	35

三 紙の継ぎ目を推理する	40
--------------------	----

III 教科書と暦	53
-----------------	----

一 廃棄された教科書	54
二 年代を推理する——暦の話(一)	63
三 爪を切るにも日を選ぶ——暦の話(二)	78

IV 日常生活を語る文書	85
--------------------	----

一 出張先からの手紙	86
二 手習いのあと	95
三 九九算が普及していた	102
四 思いがけない仮名文書	112

V 軍団と兵士をめぐって	117
--------------------	-----

一 兵士の名簿がみつかる	118
--------------------	-----

二 欠勤届と武具の検閲簿	133
三 伊治咎麻呂の乱にまつわる疑問	141
四 坂上田村麻呂の次男のサイン	148

VI 住民把握のシステム 155

一 古代の住民登録台帳	156
二 計帳のさまざまなタイプ	162
三 作成時期を記した計帳	171
四 住民異動の記録——「戸口損益帳」の発見	180
五 公営高利貸しの帳簿	189
六 「田んぼの戸籍」＝検田帳	193
七 人口推計の新しい手がかり	198

終章 地下の正倉院文書 207

あとがき

写真・図版提供

宮城県多賀城跡調査研究所(序章扉、序2・3・4、V6・7・8)

宮城県多賀城市埋蔵文化財調査センター(II2)

岩手県水沢市教育委員会(III章扉、III1、V2)

山形県米沢市教育委員会(III3)

府中病院内遺跡調査会(III5)

埼玉県所沢市教育委員会(IV3)

秋田県秋田市教育委員会(IV1、V章扉)

宮内庁正倉院事務所(VI2)

茨城県教育財団(VI3)

茨城県石岡市教育委員会(VI8)

序章 地中に埋もれていた情報

——漆紙文書発見顛末記——



多賀城跡政庁西南部の発掘風景

漆の強靱さがもたらした福音

漆は非常にデリケートな物質である。漆を塗る物体の表面に、手垢や指紋がついたりしたらもちろん、くしゃみをしてごくわずかな唾がとんだりした場合でも、上塗りをかけると、手垢・指紋・唾などの部分だけが正常に乾かない。見た目がいかにきれいであっても、敏感に察知してしまうのだ。しかし、いざ乾いたとなったら、今度は何をもってきてもびくともしない強靱さを発揮する。漆芸家松田権六まつだごんろく氏のことばをかりれば、それは漆という「生物」のせいだ。泥水中に二〇〇〇年浸っていても、漆膜の表面の硬さや電気に対する絶縁力は、まったく変わらなかったという（松田権六『うるしの話』）。

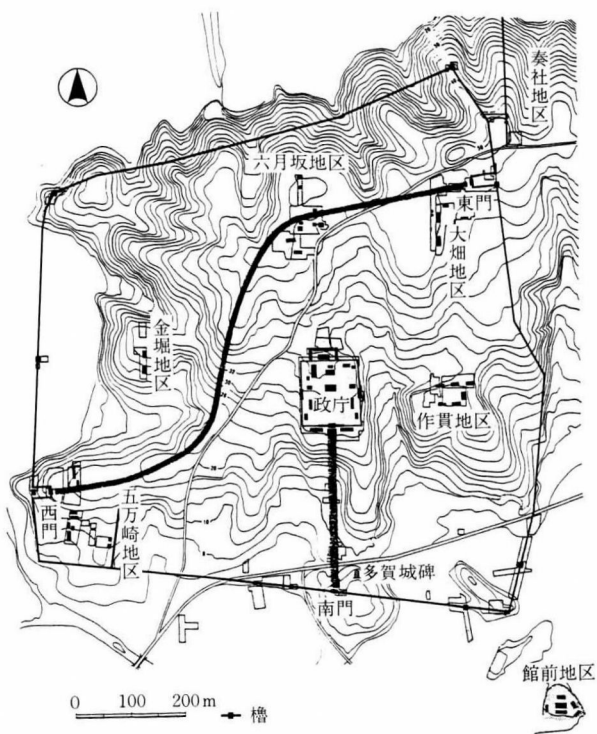
その強靱さが、古くは約六〇〇〇年まえに及ぶ縄文時代の遺跡に数多くの漆器を遺存させてきた。だが、この漆の力が古代の文書を地下に遺存させ、古代史研究者に福音をもたらそうとは、一体だれに想像できただろうか。もともと高温多湿な日本の気候では、正倉院文書しょうそういんのように倉のなかで良好に保存されてきたものは別として、文書を長く伝来するのはむずかしい。まして、中国の乾燥地帯でしばしばみられるような、地下からの文書の発見は、日本では望むべくもないと思われていた。漆紙文書うるしがみはこの「常識」をくつがえしたのである。本論でくわしく

述べるように、古代の戸籍や暦、さらには兵士の欠勤届など、想像すらできなかった貴重な文書群が地下から続々見いだされてきている。その最初の発見の舞台となったのは、多賀城であった。

不可解な「皮製品」の発見

日本の古代、中央政府の東北地方支配の一大拠点とされたのが多賀城（現在、宮城県多賀城市）。陸奥国の国府であると同時に、軍事拠点としての鎮守府がおかれていた（鎮守府はのち胆沢城にうつる）。仙台平野の東北端に位置し、海拔二〇〇五メートルの丘陵の先端部を占める。現在判明している多賀城跡は約九〇〇メートル四方の不整形に外郭線がめぐり、その中央部には東西一〇〇メートル南北一二〇メートルの築地土塀で囲まれた政庁地区がある。

わたしは一九六九年から、創設されたばかりの宮城県多賀城跡調査研究所の一員にくわわり、発掘調査に従事していた。一九七〇年の夏、政庁西南部の発掘調査で難物におちあつた。調査地域一帯に大規模な土坑群があり、複雑に重なりあっていたのである。『続日本紀』によれば、宝龜十一年（七八〇）の蝦夷の叛乱で多賀城が焼失したとある。復興作業は急ピッチですすめられたらしく、どうやらこの穴（土坑）は、焼けた瓦や土器などを投げ込んで捨てるために、



序-1 多賀城跡全図

手あたりしだい掘ったものらしい。

この土坑のひとつから、連日の干天つづきで乾ききった地面にはりついた皮状の遺物を発見した。刷毛^{はけ}でいいねいに土を取り除いてみると、三〇センチ四方以上ある。みな一様に「なんだろう?」と首をかしげるのみであった。発掘調査の進展にともない、同様な遺物がつぎつぎに出土してきた。ひとまず「皮製品」として整理することとし、土をつけたまま慎重に取り上げて、整理棚に収納した。そして、この不可解な遺物はプレハブ倉庫の片隅に眠ったまま、しだいに忘れ去られてしまった。

計帳がみつかる

一九七三年の発掘調査のこと。現場から、調査員のひとりが青ざめた顔で、事務所に駆け込んできた。手にした土器^{はじき}(土師器)のなかには、ちょうどサルノコシカケ状のものが付着している。「もっ、もじが書いてあるんですよ!」手渡された土器をのぞいて一瞬わが目を疑った。墨痕^{ぼっこん}あざやかに、鋭い筆跡で人名そして年齢が連記されているではないか。人名と年齢が連記されているとなれば、想起するのは戸籍(六年ごとに作成)か計帳^{けいちょう}(毎年作成する公民台帳)である。だが、それはごくわずかな例外を除き、正倉院文書のなかにしか現存していないと思われ



序-2 出土した計帳

ていたものだ。

土器が発見されたのは、政庁地区の西方約三五〇メートルの地点にある土坑。土器の口径は約一五センチ、文書断簡の大きさは縦約九センチ横一三センチで、わずか六行しか記されていない。しかし、行を読み進めてみると、「別項」の文字が目にとびこんできた。「別項」とは、各戸の末尾に戸口ここうの異動を記入したもので、計帳けいさふ（計帳歴名れきめい）の大きな特徴である。これはまさに計帳だ。二重のラッキーである。

しかし、不幸なことに、墨痕の保存がよくて肉眼で容易に読みとれ、しかも計帳という内容のみごとさのために、付着している物質は何か、またなぜ遺存したのかという疑問が頭をもたげる機会を逆に失ってしまった。計帳が紙以外の

もの、皮などに書かれるはずがない。だから、プレハブ倉庫の「皮製品」に思い及ばなかったのである。保存と内容のみごとさがつきなる疑問を想起させなかったのは、何とも皮肉なこととしかいいようがない。そして、調査はふたたび黙々とつづけられた。

これは「ふた紙」だ！

その後の調査のなかで、政庁西南部で発見された「皮製品」と類似のものが、小さな断片であつたが、しばしば出土した。そして計帳発見から五年後、同僚の考古学者、桑原滋郎くわはらしげお氏が苦心のすえ、それらの断片のひとつから「月」という一文字を発見する。これにより、やっと八年まえの「皮製品」との関連に気づかされ、あるいはそこにも文字があつたのではないかとの疑いをもたれたのである。それにしても、考古学を学ぶ人たちの「もの」に対する執念は、はたからみてもすさまじいばかりであつた。なぜこのようなかたちで遺存したのか、つきからつぎへと考えを発展させていったのである。こうして、漆と紙の関係が解きあかされた。

漆の摩訶不思議さの一端はすでにふれた。漆はほこりやちりを極度に嫌う。また、急激な乾燥もさけなければならぬ。漆塗りの作業では、常に漆を良好な状態に保つために、和紙を漆液の表面に密着させてふたをする。これを「ふた紙」とよぶ。「ふた紙」は塗り作業のときは

はずされて捨てられる。しかし、漆が滲み込んですっかりコーティングされた紙は、漆の力により、地下にあっても腐蝕して消滅することはない。土器に付着していたのは漆であり、「皮製品」とみていたものは、実はこの「ふた紙」だったのである。ちなみに一二〇〇年後の現代でも、漆工人は同じやり方で「ふた紙」を使っている(II-1図参照)。

当時、紙は貴重品であった。人夫の賃金が一〇文だったのに対し、経紙(写経用紙)一枚が二文、凡紙(普通の紙)一枚が一文もした。そのため、漆工人の用いる「ふた紙」は、多くの場合、役所の公文書の反故(はご)を利用した。そのため、「ふた紙」発見がそのまま、新たな古代文書の発見につながったのである。わたしたちは、これを漆紙文書(うるしがもんじょ)と命名した。

解説技術がすすむ

水をいっぱい張ったシャーレのなかに漆紙文書を置き、顕微鏡用の強いライトを向けると、つぎつぎに文字が浮かんでくる。水中に置くのは表面の乱反射を防ぐためである。当初はこの方法で、解説にとりくんだ。

桑原氏が「月」の字を発見した文書はわずか五センチ四方の小さな破片。「月」、さらに「子」「開」「閉」などの文字を判読しつつ、これは一体どんな文書の一部なのか、思いめぐら



序-3 解読された暦(赤外線テレビ写真)

していく。結局、この断片は多賀城が焼失した宝亀十一年(七八〇)の暦であることがわかった。漆紙文書発見の契機となった文書であるとともに、多賀城跡の一〇〇点近い文書断簡のうちで最初に解読できたものとして、わたしにとって最も印象深いもののひとつである。

これをきっかけに、「皮製品」と思われていた政庁西南部の漆紙の本格的調査にとりかかった。浮びあがる文字をみつめ、読み終えるたびに同僚の意見を求めて確認していく日々が続いていた。墨痕の薄い文字は、朝からじっと見ていて、やっと夕方読めることもあった。悪戦苦闘のすえ、全点数の約半分に文字を確認し終えるのにほぼ三か月を要した。

わずかな墨痕をてがかりに肉眼で解読する作